一睨せられ泥棒戰慄

先年江州の永源寺へ泥棒が這入つて、和尚の有金と金縁眼鏡を持つて行つたさうぢや。當り前のことぢや。禪坊主が泥棒を恐がつて、錠前を嚴重にしたり、心張棒を丈夫にしたりするのは淺間しいことぢや。そんな奴の所には、ドシ〳〵這入つて淡つて行くがよい。祢は元來法財は大切に蓄へるが、世間の寶財を蓄へたことはない。それで七十年以來、戸の締りをしたことがない。所がタツタ一度泥棒に這入られた、戸締りがないから何處からでも這入れる。夜の二時頃であつたが、覆面した大兵な泥棒が、ヌウーと居間の襖の間から顔を出した。祢は其の時坐つて居つた。屹と睨み付けると、泥棒の奴めブル〳〵震へる。寒い晩でもあつた。それから祢は、『貴樣は御苦勞な奴ぢや、寒けれや臺所に酒があるから呑んで行くがよい。靜かにしろ、雲水共の目を覺ますな』というてやつた。泥棒の奴『ハイ〳〵』というて、勝手に往つて酒を呑んだ。『御馳走樣になりました』と禮をいうて出て行つたが、其の後四年ばかり經つて、其の泥棒がやつて來た。全く善心に返つてお詫びに來たのぢや。

禪坊主が泥棒に驚くやうぢや、折角の修行も糞の役に立たぬ。斯んなことは豪氣勇膽の中に加はれやせぬが、序ぢやから話して置く。

第十五節　萬行速達

無難禪師は、『せぬ時の坐禪を人の知るならば、なにか佛の道へだつべき』というた。坐禪は悟りを得るの道、悟りといふは空々寂々、人間世界と懸け離れた遠い處、高い處にぶら下つて居るやうに思ひ、奥山に閉ぢ籠もらねば悟りは開けぬやうに思うて居る。それは坐禪ぢやなく、邪禪ぢや。「坐禪せば四條五條の橋の上、ゆき〻の人を深山木にみよ、」銀座の眞中で悟つた悟りでなくては役に立たぬぞ。多くの人は坐禪〻〻というて邪禪をやつて居る。畢竟迷レ己逐レ物からぢや。或坊主が榮西禪師に草木の成佛といふことに就いて尋ねた所が、榮西禪師は『草木の成佛は旦く措く、卽今汝の成佛は如何』というた。サア、要義は此處ぢやぞ、しつかり讀んで呉れ。

天桂和尙は常に「足踏二實地一」といひ、又は「佛法は實なり世間に實ならざるものはなし」というた。禪寺に行くと玄關に、「照顧脚下」と書いてあるぢやないか。卽ち禪は脚跟下の敎へぢや、足實地を踏むの道ぢや、今日の役に立たぬ坐禪なら、やらぬ方がよい。「見よやいかに加茂のきほひの駒くらべ、かけつかへすも坐禪なりけり」、勝たうぢやの、負けまいぢやのと思うて駈けて居る奴は本統の競馬ぢやない。そんな奴は決して勝てるものぢやないが、「鞍上無レ人鞍下無レ馬」、勝ち負けどころぢやない、自分もなければ相手もな

く、唯だ一心不亂で駈けて居ればこそ面白い競馬ぢや。雷に競馬ばかりにあらず日常の語默動靜、喫茶喫飯より萬行諸道に至るまで、其の眞髓祕奥は皆一つとして禪の本義ならざるはない。是れ衲が常に坐禪は諸道の根源なりといふ所以ぢや。

觀世清廉の徹見と上達

觀世清廉が衲の許に參禪して初めて能の眞髓を攫んだことは、當時世間の人がよく知つて居る。能の內に太鼓の打ち方がある、それが仲々六かしい、觀世は如何に苦心しても何うしても打てぬ。其の打ち方といふは、「或時の太鼓は金剛王寶劍の如く打ち、或時の太鼓は踞地金毛の獅子の如く打ち、或時の太鼓は探竿影草の如く打ち、或時の太鼓は太鼓の要をなさず打て」といふのぢや。是れは臨濟の四喝といふ面倒な所ぢや。觀世は此の打ち方を多年研究して居つたのぢやが、何うしても自分で滿足が出來ぬ。所が衲の提唱に出て居つて、偶々衲が此の四喝の講義をしたのを聽いて初めて氣が付いた。此の四喝を徹見せねば本統の太鼓が打てる道理はないことが分つたのぢや。それから衲の許に參禪することになつた、一時は本業をやめて一生懸命で入室した。衲も、『此處を打ち拔かねば太鼓は打てぬぞ、サア何うぢや〳〵』と嚴しく攻め付けてやつたが、とう〳〵四喝を徹見した。それからやう〳〵本統

の太鼓が打てるやうになつたのぢやが、觀世も大きに喜んだ。祢も嬉しかつたから、「石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌」と書いて與つた。此の書は平生舞臺の床に掛けて居つたそうぢやが、彼の男も却々熱心で、死ぬまで修行をやめなんだ。

鐵舟無刀流開立の由來

祢が山岡鐵舟居士と知り合つたのは明治十八年、麻布の曹溪寺で雪安居に無門關の提唱をして居つた時ぢや。居士が偶然やつて來て二三問答を試みたが、卽座に意氣投合して師弟の禮を行うた。此の提唱が終つて、居士の請ひに依つて祢は市ケ谷の道林寺に這入つた。晉山式を擧げたけれども、此の式に列なつたものは祢と鐵舟居士とタツタ二人切りであつた。其の時の晉山の偈に曰く、

大道元來平似レ底、不レ移二寸歩一據二猊床一　白厓幸有二
鐵舟在一　一點法燈放二瑞光一
三千劍客今何在　獨許莊周致二太平一

寺というても二十疊しかない觀音堂許りぢや。壁もなく、戸もない、障子もない破堂に蓆を敷いて坐つたのぢや。段々人が寄つて來て、五六十人も坐るのぢやが、迚も堂内には坐られぬから、墓所や裏の卵塔場に坐つた。雨や

雪が降ると大變な騒ぎをやる。傘を墓と墓との間に乗せて、其の下に坐つて居るのぢや。仲々眞味にやつたので、鐵舟居士でも、大德寺の管長になつた宗般和尚でも、皆んな斯うしてやつた。二年も經つて山岡の發意で借禪堂が出來た。

さういふ譯で鐵舟居士とは心易くなつたが、居士が、劍道の達人であることは世間で皆知つて居る。其の來歷に就いて詳しい話を聞いたことがあるが、禪は劍道上達の根本である一例として、茲に其の概略を話して見よう。居士は十三歳の時に初めて志を立てたといふのであつたが、其の時自ら思ふやう、武士たるものが君に事ふるには先づ死を視ること歸るが如く、如何なる敵に對するも確固不動勇往邁進ならざれば、眞に忠を盡すことは出來ぬ。此の精神の修養は先づ心膽を鍊磨するにあると、斯く思ひ定めて父の朝右衛門に心膽鍊磨の方法を問うた。此の時朝右衛門のいはるゝには、『吾家の御先祖高寛殿は、劍法を小野治左衛門、小太刀半七の二人に學び、又禪學の蘊奥を究めて東照神君に奉仕し、以て屢々戰功を立てられた。其の旗には「吹毛不曾動」の五字を題したのを用ひられて居つた。今其方も心を練らんと思ふなら、武を勵むと同時に禪を修むるに如かず』といはれた。是に於いて居士は始めて芝村の長德寺なる願翁和尚に參じて、十年間一日の如く骨折つたが、願翁和尚はとう〳〵大事透得を許さなんだ。併し鐵舟は少しも志を挫かず

して、伊豆の龍澤寺なる星定和尚に參じたが鐵舟居士は休日毎に拂曉に江戸を出で、騎馬で箱根峠を越え其の夜に始めて龍澤寺に着くのである。寺に着けば直ちに星定和尚に參じて、後に朝飯を喫する。斯樣にして如何に暑い時も、將た如何に寒い時も一度たりとも休んだ事がなかつた。其の後には洪川、滴水、獨圓等の和尚に參じて、遂に滴水の印可を得たのぢや。

劍道の方は九歳の時より修行にかゝり、眞影流を久須美閑滴齋より授かり、後に井上清虎に就いて北辰一刀流を學び、最後に淺利義明の門に入つて一刀流の奥義を究めんとし、頻りに苦修を重ねたが、或日滴水和尚に參禪のとき劍道の事を語ると、滴水和尚が「兩刃交レ鋒不レ須レ避」兩方が眞劍を拔き放つて立ち合つた。一歩を避くれば直ぐに一刀兩斷ぢやが、サア何うすればよいかといふのぢや。そこで鐵舟は此の句を日夜に拈提して、三年間といふもの一心に苦心研鑽したが、とう〳〵徹底して許しを得た。それから直ぐに淺利氏に見えて立合をして見たが、不思議にも太刀尖鋭く、技能の神妙なる所、以前とは全く別人となつて居つた。淺利氏は大いに驚いて木劍を地に拋ち、『足下は最早や十分の腕前となられた、我が一刀流の秘譯をお傳へ申さう』とて、遂に一刀齋の無想劍の極意を授けた。之れより居士は一層劍道の秘法を究めて、遂に古人未發の蘊奥を究め、無刀流と稱する一派を開くに至つたといふ次第であつた。

烈火の一念眞筆成る

黄檗宗の本山、山城宇治の黄檗山の門頭に「第一義」といふ額が掲つて居る。之れは黄檗宗の中興の祖高泉和尚の書いたものぢやが、和尚が此の額面を揮毫するに就いて面白い話がある。或日のこと和尚は、一升餘りも小僧に墨を磨らせて此の額面の揮毫にかゝつた。高弟の大隨長老といふも側でそれを見て居るが、和尚が書き上げた「第一義」を手に取つて、『之れは第一義になつて居りません、書き直して下さい』というて、即座に引き裂いて仕舞うた。そこで和尚も仕方なしに更に筆を執つて書き直した、今度は餘程見事に出來たと思うて居ると、大隨長老は『之れも駄目ぢや』というて、遠慮會釋なしに丸めて仕舞うた。和尚は長老のいふがまゝに『よし〳〵』と書き直すと、又今度も『駄目ぢや』と引裂いた。斯うして、書いては破り、書いては破りすることが八十四枚。とう〳〵和尚も根盡きて、筆を投げ出して烈火の如く怒り出した。所が其の時大隨長老はスッと立つて厠に行つた。和尚は其の隙を見て、今度こそは大隨の心膽を奪ふものを書き上げてやらうと決心し、滿身の精を注いで筆を揮うた。書き了つた所に大隨長老は返つて來た。今度の筆力を見て手を拍つて喜んで、『之れでこそ初めて黄檗山の門頭に掲ぐることが出來ます』と、手の舞ひ足の踏む所を知らぬばかりに悦んだといふこと

ぢや。

高泉和尚が烈火の如く怒つた一念が筆端に傳はつたから、初めて活きた文字が書けた、それまでといふものは文字の形は爲して居るが、皆死んで居る。それぢやから何枚書いても大隨長老は皆引き裂いて仕舞うたのぢや。萬道諸行の眞髓を攫む根本義といふは皆此處ぢや。此の根本義を修得するのが禪道ぢや。

劍客武舟の苦闘物語

南天門下に一人の劍客が居る、武舟居士堀口朝次郎といふ。此人が劍道の奥義に達して天下無敵の神技を養ひ得たのは、全く禪の賜ぢやというて居る。其の來歴に就いて、嘗て衲の所で本人が詳しく話したまゝを掲げて見よう。

堀口は曰く、私は德島縣名東郡國府町の百姓で、幼少の時より鋤鍬を持つて働いて居りました。二十歳の頃神戸に出て人の家に奉公して居りましたが、或る年私が宅へ歸りますと、父が竈の下に何か卷いたものをくべて居る。私は變だと思つて、『それは何んですか』と父に尋ねると、父は『之れか、之れは劍道奥義の卷だが、己は不幸にして之れを傳へるものがない、それで今燒いて居るのだ、貴樣のやうな男の子がありながら何の役にも立たぬ、百姓や

商人にはいらぬものだから燒いて居る』と、サッサと燒く。私は殘念とは思ふが、如何とも詮方がない。父は山岡鐵舟居士の門人で、其の祕術を握つたといふことである。禪は相國寺の荻野獨園禪師に參して、三日三夜に見性したといふ位な人で、私どもとはとても話にならぬ。

父か卷物を燒いたのを見て、如何にも殘念に堪えない。自分は折角劍道家の家に生れながら、父の道を繼げぬといふことは何うした不甲斐ない事であらうか。一つ之れより劍道を修行して父の後を繼がんと決心し、神戸に歸つて後、奉公先から擊劍道場に通ふことにした。處が身裝が賤しいから師弟の杯は出來ぬが、敎へてやらうといふ師の命。それから面をかぶり小手をあて、一生懸命で二十日間ばかり通つた。その中一本位師の頭も叩けるやうになつた。之れなら大丈夫だ、一つ宅にかへつて父と立合つても一本位は打てると思つて喜んで國へ歸つた。

父に向ひ『一本立合つて下さい』と申すと、『ヨシ、サー來い』と素面素小手の眞劍だ。『ヤー』と立合つたが、父には一寸も隙がない、何うしても打込むことが出來ぬ。私は遂に平伏して仕舞つた。父は『馬鹿、貴樣等が何劍術が出來るものか』と一喝食はせられた。そこで私は殘念で堪まらない。仕方なしに町はづれの磧で獨竹刀を振り廻して居つた。三日三夜位やつた。そこで又父に立合つて吳れと申し込むと、父が又立合つた。『ウン、ちつとは竹刀

が使へる、貴様が己の歳位になつたら、少しは使へるだらう』と喜んで呉れた。

驚く時に驚くは禪機

それから私は京都に行き、武德會で修行し、其の後大阪、神戸と隨分警察や所々の道場で試合つて見たが、何うも最一息といふ所が手に入らぬ。立合つて負はせぬが、未だ不安心な所がある。其の時不圖父が兼々いつて居つた「劍道の極意を捕へるには、何うしても禪を修めねば可かぬ」といふ事を思ひ出して、自分も之れから一つ禪を修行しようと決心した。然しそれには適當の師を選ばなくてはならぬ。何んでも隙の無い師匠でなくては駄目と、先づ最初に南禪寺に行つて南針軒氏を訪うた。

相見して拜すると、之れは案外、全體が隙だらけ。禪は知らぬが何んでもこんなに隙のある師では到底駄目だと、入室もせずに歸つて來た。次に高源師の下に行き相見を得たゝすると稍々隙がないやうだから入室を賴んで參じた。すると老師は『公案があるか』とのお尋ねであつたから、今なら『無』とか『喝』とかいふであらうが、何んにも知らぬ時だから、劍術の時の掛聲で『イヤー』と怒鳴つた。老師は吃驚して座をすべつた。それを見て、これも駄目だと思つたから出て仕舞つた。禪から行けば、斯んな時に驚くのは禪ださう

であるけれども、私はそれを知らないから去つて出た。

こんな事ではとても不可、何處かに隙のない師はないかと、色々尋ねた。すると或る人が、『君の氣に叶ふ師は、西宮の南天棒の外には恐らく天下に師とする人はあるまい』と敎へて呉れた。それではと早速西宮に出掛けた。途中で祥福の師家に逢うたが、何うも隙があるやうだ。それから直ぐ西宮の海清寺に行つた。相見を願ふと、こちらへと通された。室に入つて見ると、南天老師はゆら〳〵座睡をして居られる。所が體全體少しの隙もない。座睡をして居られるのに一分の隙がない。是れは擊劍家なら隨分強いわいと思うて、遂に弟子入をすることにした。

無字の透過大願成就

南天老師は私に「無」字の公案を授けられた。サア、それから私は無字三昧『ムームー』とやつて居つた、道を歩くにも『ムームー』と怒鳴つて歩くから、向うから來る人が吃驚して逃げて行く。山を見ても『ムームー』川を見ても『ムームー』と、一心不亂に考へて居つた。之れが爲め西の宮で電信柱に衝當つた事も兩三度。向うから人が來ても、此方が『ムー』と叫んで通るから皆除けて行くといふ有樣であつた。老師の室に入つて『ムー』とやつた。然し未だ許されなかつた。又一心三昧にムーを續けた、すると或る時不圖無字に就い

て實に何んともいひやうのない心持がした。嬉しいといはうか、何んとも譬へやうがない。ソコで入室すると、老師は『オー、其れでよい』といはれた。ア、是れ我が年來の宿願が遂げられたのであると、早速父を喜ばせようと思うて、久し振國に歸つた。

そして『父さん、私は見性しました』といふと、父は『何に、見性した、見性したらサー直に立合つて見よ』といはれた。私は父と立合つた、すると父は木刀を置いて『オー、よい〳〵、立派な腕に成つた』と非常に喜ばれた。實際此の時父の眼には露の涙が宿つて居つた。自分は三十年來、只だ一度として父を喜ばした事がなかつたのに、座禪のお蔭で、今父を喜ばすことが出來た。誠に有り難いと私も思はず涙が出た。父に一片の安心を與へたのは確かに座禪の力である。見性の效である。老師の御蔭である。それから私は、益々奮勵努力し、我が大願を成就せしめねば止まぬと、固く心に誓つた。

獅子と聲競べで氣絶

其の後、晝は擊劍の仕合ひ、夜は海清寺に參禪して一心に修行を凝らした。所が見性以來、劍術が柔〳〵なつて時々人に擊ち込められる。以前では決して人に打ち込まれることはなかつたが、座禪以來、屢々人に打ち込まれる。或る人などは、餘り座禪をするから擊劍が柔かくなつたぞ、といふものもあ

つた。然し私は人に擊たるゝことが以前のやうに苦にならぬ。擊たるゝ儘別に氣にも止めぬ。見性前では、人に一度擊たれでもすると氣が立つて堪へられなかつたが、見性後はそんな事は何んでもないやうになつた。實際、劍は禪に依つて變化を來たすものである。卽ち工夫に依つて劍は變化し來るものである。そこで劍は禪と同一であることを確めた。

或る時大阪で、私の友人が耶蘇の演說をしたことがあつた。其の時演說の後で種々な餘興をやつた。私にも何か餘興をやつて呉れといふから、私は意氣なり演壇に立つて、『現今、宗敎を擴張するは力である、日本魂といふも力である、今日此處に會せらるゝ諸氏は、宗敎を押し廣め、人民をして火坑より救ひ出し、天帝の下に導かんとするとある。然らば耶蘇の力は大力でなくてはならぬ、然るに宣敎師の面々は皆顏色憔悴して、少しも活氣なく、恰も病人の有樣である。他人は暫く措き、先づ自分の體すら天國に運ぶことは覺束なからむと思ふ、我が佛敎はそんな死んだ敎へではない、佛敎の力、日本魂の力はそんな薄つぺらなものではない、今茲に於て僕が佛敎の力を顯はして見せる』と大喝一聲『ムー』とやつた。會するもの皆色を失つて唯だ茫然として居る。私の全身からは汗が瀧のやうに流れた。『此の力でなくては人は救へぬものだよ、僕の餘興は之れだ』といつた。皆驚いて、耶蘇の火坑救出談も消えて仕舞つた。

大阪の道頓堀に、大きな獅子の見世物が來た事があつた。私がツカ〳〵と檻の側に近づくと、獅子が吠え出した。そこで私の思ふには『獅子と己れの聲とは、どちらが大きいか一つ競べて見よう、天竺の甲羅堂の鐘の音さへ止める者があるといふから、何に獅子位に負けるものか』と其の獅子の入つて居る檻の鐵格子の所へ顔突き出して、私も『ウオー』と呻つた。すると獅子も愈々大きな聲で『ウオー』と猛る。それで私も亦『ウオー』と怒鳴る。獅子は益〳〵猛つて『ウオー、ウオー』と續け樣吠へ狂ふ。私も何んぞ負けるものかと、夢中になつて怒鳴つたが、何時の間にか肺を破つたと見えて、血を二三升も吐いた。そして其の儘其處に倒れて仕舞つた。其の後の事に就いては私は全く知らぬ。不圖氣が附いた時は私は靜かに自分の宅に休んで居つた。之れは後で聞いた話だが、私の倒れたのを見て友人が非常に驚き、早速醫者を迎へ藥なども澤山飲ませて見たけれども、何うも何んの效果も見えぬ、そこで友人も非常に心配して、之れではとても助かる見込みはあるまいといつて居つたさうである。然し介抱して靜かに擔架に載せ宅まで荷つて來て吳れたとの事であつた。

まあこんな具合で助かるは助かつたものゝ、其の代り一切水を浴びることが出來なくなつて、今でこそ左程辛いとも感ぜないやうになつたけれども、其の當時では水を見ても、ズーと振へ上つた位であつた。考へて見れば實際

馬鹿なことをしたものであると、自分ながら笑止に堪へなかつた。然し今日では最早大丈夫、撃劍もやれば柔道もやる。反つて昔よりも體も丈夫になり、度胸も据はつた樣である。

海清寺鐘の聲大刀の叫

西宮の海清寺の本堂側に一本の大きな椎の木がある。其の木の枝に米二俵掛の俵に土を入れて吊して在る。毎朝起きると、先づ裸のまゝで其の土俵にぶッつかる。始めの間は何うしても自分の方が俵から彈飛ばされたが、今日では其の土俵を彈返してやる。元來海清寺は劍道も有名であるから、京都の武德會を卒業した書生等がよく尋ねて來ることがある。書生が來るや否や、直きに一本立合ひ、そして打つて〳〵打ちのめす、すると大方の書生は屈たれて逃げて仕舞ふ。中には『少し御師範を願ひたい』なぞいふものがある。そこで私は『ア、居るがよい、其の代り私がやる通りにやらねばいかぬ』と約束をして置く。朝は四時に海清寺の鐘が鳴る、衆僧等が起きるから、書生等にもサア起きよと一同を起す。そして裸の儘土俵に當れと引きずり出して額で土俵と相撲をとらせる、如何に極寒の朝だつて一日だつて怠つたことはない。それが濟むと雲板が鳴る、サア粥座ぢや往つて食へというて、一同を引連れて飯臺座に着く。粥といふのも名ばかりで、麥粥の水ばかりぢや、

書生連には實に堪つたものではない、汁だけ啜つて來ると、サア是から擊劍ぢや、『サア來い』と一生懸命でやる。それが濟むと今度は裏の畑の草取りぢや。如何に土用の暑い時でも、頭からカン〳〵照り附けられて、一心不亂に取る。其の中齊座となる。又麥飯ぢや、食うて少し擊劍を初める。夜になれば禪堂に入つて坐禪をする。斯ういふ日課で毎日々々修錬するのであるから、大方は逃げ失せて仕舞うが、中には仲々感心なものもある。奥州から來て居る某などは、眞に劍客にならむと一生懸命になつて、以上の日課通りをやつて夜は海清の禪堂で熱心に坐禪をして居るといふ長い經歷談を物語つた。

第十六節　大度達識

修禪者には宇宙を呑吐する大度量、總ての人類生物を一子の如く哀憐する大慈悲、名利毀譽を超脱せる大識見より現はれ出づる種々の德風が自然に具はるは當然のことぢや。上來述べた所に依つても之れを知ることは出來やうが、尙ほ其の例を擧げて話して見よう。

白隱禪師が門前の酒屋の娘を胎ませたといふ次第から、其の赤兒を引取つた話は有名なことぢや。門前の酒屋の娘が近所の若い者と密通して懷妊した。とう〳〵親に覺られて、相手の男は誰ぢやと攻めらるゝ。娘は兩親の怒りを

恐るゝ餘りに、白隱禪師と密通したといひ立てた。娘の料簡では、兩親は白隱禪師を生佛樣というて厚く歸依して居るのぢやから、禪師樣と密通したといひ立てたら叱りもされまいと思うたのぢや。之れを聞いた兩親は、怒るまいことか驚くまいことか、諦れかへつて仕舞うて開いた口が塞がらぬ。生佛樣と拜んで居つた糞坊主奴、狸坊主奴、己れの一人娘を疵者にしたというて、髮逆立てゝ怒り出した。分娩するを待ちかねて、父親は其の赤子を攫んで、『サア賣僧奴、斯んな汚らはしいものは引き取つて呉れ』と惡口雜言をいうて突き付けた。白隱禪師は、『あゝさうか、よし〳〵』というて、其の赤兒子を受取つた。

此の次第が傳はつて近所近邊の大評判となり、今までは禪師の通る姿を見ると、『生佛樣』というて拜んだものが、唾を吐きかけんばかりに罵詈讒謗され、寺内の雲水どもまでも袈裟行李をからげて立ち去るといふ有樣で、廣い寺の境内は赤兒の泣聲の外には鐘の聲一つせぬ寂しさになつた。けれども白隱和尙は一向平氣で、法衣の袖に赤兒を包んで、隣近所に貰ひ乳をして育てて居つたのぢや。

或日のこと、冬の寒い夕暮、禪師は赤兒を法衣の袖に包んで托鉢から歸る途中、酒屋の前に差しかゝると、此の家の娘、赤兒の母は、むら〳〵と起る悔悟の念を禁じかねて、跣足のまゝ家を飛び出して禪師の法衣の袖に縋り付

き、『禪師樣、何うぞ御勘辨を願ひます、誠に相濟まぬことを致しました、何うぞ許して下さい』と狂氣の如く大聲を揚げて泣く。其處に父親も母親も走つて來た。娘は手を地について過つた。『實は隣家の誰某の子であつて、惡いことゝは知つて居ながら父樣の怒りを恐れて禪師樣に恥を塗り付けました』といふ次第を白狀した。それを聞いて兩親の驚き慨愧は又一通りではなく、額を大地に磨り付けて、お詫をいふ。禪師は一向平氣で、『あゝさうか、よし〳〵』と赤兒を其の母に返して、『之れで袴も安心した、此の上は出來て仕舞うたことは仕方もないから、お前さん方も餘り八釜しいことをいはずに、隣家の何某を養子に貰うて此の家を相續させては吳れまいか』と相談をかけた。狸坊主ぢやの糞坊主ぢやのと罵られた禪師が、一家圓滿の福の神で再び崇めらるゝやうになつたのぢや。

執權時賴を大喝一聲

兀菴和尙といふは宋の代の一世の禪德ぢやが、我が龜山天皇の朝に、禪道弘通の爲め飄然一葉の舟に乘つて日本に來た。之れが六十四の歲で、先づ博多の聖福寺に着いて行李を解いたが、北條時賴の迎へを受けて鎌倉の建長寺に入寺した。時賴は初めて和尙に參見して、驚異讚嘆していふことには、『老師は私が嘗て夢中に見た高僧で御座る』と禮拜したが、和尙は大喝一聲、『痴

人夢を說く勿れ』と叱り飛ばしたのぢや。何うぢや、偉い見識ぢやぞ。時賴は此の大喝に遭うて益々敬服し、歸依の念は一層厚くなつた。

建長寺の開山蘭溪禪師は法席を和尙に讓つたから、和尙は建長寺の第二世となつた。和尙の建長寺晋山式の當日、大衆は此の盛儀を拜せんとて雲霞の如く寄つた。建長寺の本尊は地藏菩薩ぢやが、和尙は徐々と佛殿に進み、本尊に向つて禮拜するかと思ひの外、『菩薩、壇を下りて我れを禮せよ』と一喝した。其の峻嚴高邁の氣象は滿堂を壓し、大衆覺えず戰慄したといふことぢや。時賴の崇仰愈々厚く、日々和尙の會下に參じて、「向上の關捩子」を透過した。

然るに和尙は文久二年に忽然建長寺を退山し、「無心遊二此國一、有心復二宋國一。」というて再び飄然と宋に歸つた。

青山白雲悠々の奇翁

賣茶翁の月海といふは禪門の一奇人として博く其の名が傳はつて居る。常に茶道具を荷うて氣の向くがまゝに行商し、足の止まる處に爐を開いて茶を施して居つた。「茶錢は黃金百貫より半文錢までばくれ次第、たゞのみも勝手、たゞよりはまけ申さず、達磨さへおあしで渡る難波江の、流れを汲める老の我身ぞ」というて、志ある人の喜捨にまかせて世を送つて居つた。晚年に

至り、永年愛玩して居る茶道具を全部火に投じて燒き拂つた。其の句に曰く

「我れ從來孤貧、地なく錐なし、汝吾れを佐輔して曾つて年有り、或は春山秋水に伴ひ、或は松下竹陰に鬻ぐ、故を以て飯錢缺くるなく、八十餘歲を保ち得たり。今已に老邁、汝を用ゐるに力なし。北斗身を藏す、將さに天年を終らんとす、却つて後に世俗の手に辱かしめらるゝは汝恐らくは遺恨あらん。是を以て汝を賞するに火聚三昧を以てす、直ちに火焰裏に向つて轉身し去れ、轉身之一句如何。良久しうして云ふ、却火洞然毫も盡さず、青山舊に依る白雲の中と。便ち丙丁に付す」といふのぢや。仲々面白い。

それ以來門を閉ぢて出でず、客が來ても斷つて會はぬ。或人が、何故道を說いて後人を導いて下さらぬかと尋ねると、『若し我が一擧頭、普く物機に應ずることが出來るならば人の師となるも善からうが、徒らに學解を以て身を飾りて宗匠然たることは、我れの大いに恥ぢとする所ぢや』というて、「笛吹かず太鼓たゝかず獅子舞の、あと足になる胸のやすさよ」というた。其の抱負、識見、眞に一世の奇人ぢやないか。

邪宗異端も一視同仁

膽玉を大きく持つて、來るものには皆敎へを授くるといふのが禪の主義ぢや。耶蘇が來れば耶蘇禪を敎へ、法華が來れば法華禪を敎へ、眞宗が來れば

眞宗禪を敎へ、天理敎が來れば天理禪、何んでも來るものを皆んな容れて敎へてやる。南天が會裡には嫌ふ底の法なしぢや。耶蘇だとか、神道だとかいうて排斥するやうな、そんな膽玉の小さなことではいかぬ。心を大きくして來るものを皆な敎へてやる考へでなくては、佛祖正傳を繼いだ坊主とはいへぬ、禪家の居士とはいへぬ。それぢやから心を大きく持てといふことを、祢は若い者に常にいうて居る。

之れは當り前ぢやけれども、坊主根性というて一つの宗派に固まつて仕舞ふと、異宗邪宗のものを毛嫌ひして蛇蝎のやうにいふ。料簡の狹いからのことぢや。來れば敎へてやるが、祢は耶蘇の敎へには感服せぬ。本より敎へといふ敎へは何の敎へでも惡いことはないがさ、耶蘇は二佛二體の敎へぢやから面白くない。耶蘇位の男が、何んで耶蘇は臍下にあると敎へなんだかと思ふ。

凡て事と望みとは二つある筈のものぢやない、一つのものが差別無差別となつたまでぢやから、二佛二體にせんでもよいのぢや。それで祢は殊に耶蘇の者に敎へてやり度い、迷うて行くのが可哀さうぢや。

儆岸の豪僧感泣拜謝

指月禪師といふは、武州小曾根の西光院といふ小さい禪寺の和尚であつた

けれども、其の德識の高いことは一世に名が譽いて居つた。嘗て本光和尚といふが禪師を訪うたことがある。此の本光和尚は又博學强記、豪放不羈天下無敵の評判の和尚ぢや。天下の禪堂を歷訪して一人の心服するものがないから、傲岸惡竦の機鋒を恣にして、叢林を荒して廻つた。さうして武州の小曾根に來たのぢや。小曾根の西光院を訪うたが、殿堂は極めて微々、一世の高僧の居るべき住居とも見られぬのぢや。和尚は草鞋も拔かずに驀ぐらに臺所に這入り込んだ。けれども山內寂として一人の小僧も居らぬ。和尚は忽ち輕侮の念を起し、百聞は一見に若かずとは此の事であらう、遠くより聲望を聞いて居れば偉いものぢやが、實際に來て見れば斯ういふ有樣ぢやと太く失望した。先づ其の中には誰か來るぢやらうと、緣側に腰打かけて待つて居ると、本堂の方に讀經の聲がする。はて誰が讀經して居るのぢやと靜かに本堂の方に行つて、大戸の隙間から窺うて見たが、一人の老僧が香を燒き拜を設けて梵網經を讀誦して居る。其の容貌風彩は決して凡僧にあらず、又其の式を行ひ、法を修することの嚴肅綿密なることは、數百の大衆を率ゐて大寶殿で大佛事を營んで居るばかりの有樣で、實に威儀整々、凜然として犯すべからざる次第ぢや。本光和尚も此の有樣を一瞥して坐ろに畏敬の念を起し、殆んど毛髮卓立するの思ひであつたと後でいひ遺して居る。

そこで本光和尚は再び靜かに臺所に行き、草鞋を解き、身體を淸め、嚴か

に儀装を整へて、縁側に端坐して禪師を待つて居つた。所が稍々暫らくして禪師は式を終つて本堂より下つて來た。和尚を能く〳〵々々視て、それから自分の居間に案内して初めて延見の禮を取つた。和尚は禪師の居間を見廻すに、恬淡瀟洒、一片の贅品なく、何とも斯ともいふにいはれぬ好い心持ちがする。禪師は自ら茶を點じて薦め、佛弟子の用心を示誨すること懇々切々〳〵、其の一言一語が悉く肺腑を突き、和尚は覺えず偏身より冷汗流れ出で、歡喜骨に徹したというて居る。涙を流して師弟の緣を結ばれんことを願うて許され、其のまゝ此の西光院に留まつて禪師に師事したのぢや。禪師の此の德風堅行は實に修禪者の身に自然に現はるゝ德の光りぢやぞ。

第十七節　死生超脫

死生超脫の修養は人間非常の場合にのみ入用であるのぢやない。日常平時事々物々に接する一擧手一投足、お三が水を汲むにも、小僧が庭を掃くにも、寒喧の挨拶を爲すにも、喫茶喫飯、尋常平々凡々の瑣事を處する場合に至るまで、此の死生超脫の修養が入用なのぢや。活機活略といふも、豪氣豪膽といふも、萬行速達といふも、大度卓見といふも、畢竟死生超脫が本ぢや。禪、禪といふも、要するに死生超脫の境に到達する努力の外はないのぢや。

前にも說いたやうに、我々の此の肉體は地水火風の四大原素の集合體ぢや。

そこで此の四大原素を一つ宛元に還す、地性は地に還し、水性は水に還し、火性は火に還し、風性は風に還して仕舞ふと、其處に起るべき煩惱もなく、妄想もなく、苦もなく、樂もなし。此の境界の中に兀座して、『自己本來の面目如何』と觀じて見る。其の時には有らゆる虛念は皆去つて實念のみ現じ、身は是れ天地と一體、萬物と不二なることを了々と感得することが出來る。是れ卽ち大死底の境界ぢや。空想ぢやないぞ、想像では何んにもならぬが、實地に其の境界に往來するのぢやから、再び死境に臨んでも何等遲疑の念も生ぜず、電光影裏截二春風一で、三尺の白刃が眼前に閃いても、春風ぢやぞと平然從容笑つて濟ますのぢや。「生死を離れたる境には生死なし、」火に入つても燒けず、水に入つても溺れず、三塗地獄に入つても園觀に遊ぶが如く、餓忌畜生に入つても報いを受けざるが、是れ禪の修養に依つて攫取したる大死底の境界ぢや。

此の大死底の境より飜然と大活して、お三は水を汲まう、小僧は庭を掃かう、百姓は鍬を打つて田を耕さう、商人は珠盤を彈いて帳面を付けよう、大工は鉋を持つて木を削らう。事々物々機に臨み變に應じて可ならざるなき、是れ人間修養の極致ぢやないか。

山岡鐵舟居士の臨終

山岡鐵舟居士は明治二十一年の二月に胃癌に罹つて床に就き、同年七月十九日に沒くなつた。其の以前、祢が道林寺に入山式を擧げた日に、居士は祢に向ひ、『かねて大般若經九十九卷を書寫し來れるが、未だ校合の師を得ざる爲めに甚だ不安で居るのは殘念ぢや』と話す。そこで祢がいふには『居士の願力は甚だ廣大なことぢや、恐らく三十年の月日を要することぢや、寧ろ揮毫點一點すれば、大小半滿五時八教直下に書寫し畢はる、恒沙の勞を積むの要はないとぢやないか』といふと、居士は笑つて、『老師の言は誠に最もぢやが、拙者は三十年を期するも書寫し畢りたい、老師何卒校合の勞を取り給はれ』といふから、祢は早速承知した。其の時は已に第六卷まで寫し終つて居つたが、居士は直ぐにそれを携へ來つて、寫經の字詰、字體等が經本の體裁を爲せるや否やを正した。祢はそれを見て、『美事なものぢや』と嘆稱したことであつたが、居士はそれから日々書寫を續けて行つたのぢや。

所が頗ひついた胃癌は段々重くなつて來た。或時醫者が診察に來て大いに驚き、『先生には最早や脈が御座りませぬ』といふ。然るに居士は笑つていふことには、『拙者の脈は既に三日以前から絶えて居る、拙者は最早や三日前に死んで居るのぢや、けれども書寫の大般若經が尙ほ一卷殘つて居る、之れを書き畢る本願を遂げるまでは拙者は死なぬ』というて居つたが、七月の十九日に全部を書き畢つた。而して此の日早朝に起きて浴室に行くから、門人が

之れを扶けようとすると、居士は斥けて獨で入浴し、夫人に着物を出せと命ずると、夫人は何氣なく通常の服を出した。居士は『其の着物ぢやない』といふから、夫人は直ぐに其の意を悟り、泣きながら豫ねて用意の白衣を出すと、居士自ら之れを着て病床に返へり、煙草を一服吸うて結跏趺座、金剛經一卷を懐にして、右手に團扇を執り、左手に念珠を持ち、座の左右を取り卷ける親戚門弟を顧みて、『それでは皆さん丈夫で働いて呉れ、乃公は今から出かけるよ、さようなら』というて、ニッコと笑つて目を瞑つた。五十三歳ぢや、書寫の大般若經は増上寺に藏まつて居る。

心の問はゞ何と答へん

品川彌二郎さんが師匠の吉田松蔭に、生死安心の道を問うたことがある。義を泰山の重きに比し死は鴻毛の輕きに見ることは能く承知して居りますが、併し平生に安心して從容死に就くの覺悟がまだ出來ませぬが、如何にすれば此の覺悟が出來ましようかと尋ねた。其の時松蔭は之れに答へて、『忠義の上には生死があるものか、生死をいふは不忠の臣ぢや』と叱つたといふことぢや。

其の後吉田松蔭は獄に繫がれた。其の姉が獄中へ觀音の像を送つたら、松

蔭は手紙をやつて、『わしが國事に盡すは卽ち觀音ぢや、何うしてわしの身に刀が立たうぞ、假令わしは死んでも死なぬ身ぢやぞ、憂ひ給ふな』というてやつた。

鍋島の臣下の或者が禪宗の信者であつたが、或時日蓮の坊主が來て、『禪は天魔ぢや地獄に墮つる、日蓮宗に改宗せよ』と說く。すると其の人が答へていふことには、『それは改宗は出來ぬ、其の譯はわしが主君は此の頃御他界になつた、矢張り禪宗であつたから、定めし地獄に墮ちて居らることであらう、さうすれば自分は獨り極樂に入つては濟まぬ、自分も地獄に行つて鬼どもを塵にして御主君を救ひ上げ奉らねば相成らぬ、斷じて改宗は出來ぬ』というた。

吉田松蔭といひ、鍋島の臣といひ、忠義一枚で脫落して仕舞うた。之れが忠禪ぢや。俳優の先代芝翫は熱心な參禪者であつたが、其の辭世の句に『いでやをどり越えん花の三途川』といふがある。死んでも踊つて居る踊り禪ぢや。何うぢや、此の死生脫落の用意があるか。妻子、財寶、名利の愛着に引張らるゝと、從容不動のかねての覺悟も朝日に雪の解けるやうな脆いことゝなりはせぬか。『なき名ぞと人には誰も答ふべし、心のとはゞ何とこたへん、』人は欺くことも出來るが、自分の心は欺けぬぞ。しつかりやれ、しつかりやれ。

第十八節　總括

趙州和尚の處に一人の坊主がやつて來た。「一物不將來の時如何、」『今日折角伺ひましたけれども何も持參致しませぬ』といふ。所が趙州は之れに答へて「放下着」、『そんなものは捨てゝ仕舞へ』といつたのぢや。前に繰り返して說いたやうに、我々の修養上の障害物は千種萬態ぢやが、其の根本は執着心ぢや。己は利口ぢやと思ふも執着、金が出來たと思ふも執着、博士になつて喜ぶも執着、高等官になつて喜ぶも執着、窮境に陷つて悲觀するも執着、順境に進んで人生を樂觀するも執着、悟りを開いて喜ぶも執着、執着を離れたと

思ふも執着。上來說き來れる禪の修養といふは徹頭徹尾、此の執着心を取去つて仕舞ふことぢや。

一切の善惡苦樂の根本

支那の法性寺といふは禪宗の名刹ぢやが、此の寺の庭に高い幡竿があつて、竿の頂上の白い幡が風に吹かれて片々と動いて居つた。恰度雛僧が二人出て來て此の幡竿を見た。一人の僧が何心なく『幡が風に吹き靡かされて居るは勇ましい』といふと、一人の僧が『馬鹿をいふな、幡には幡の自性がある、風に吹かるゝにあらず幡自身が動いて居るのぢや』と喧嘩を持ちかけた。

前の僧も承知せず、『幡が獨手に動くといふ馬鹿なことがあるか、風が動かせるのぢや』といふ。『イヤ幡動ぢや』、『いや風動ぢや』と二人の坊主はとう〳〵取組み合ひを初めた。

其處に和尚の慧能禪師が出て來て、『這個は是れ風の動くにあらず、幡の動くにあらず、汝等の心の波が動くなり』と判決を與へてやつた。善惡苦樂一切の諸法、一切の諸相は皆畢竟我見偏見の迷妄の執着心から起るのぢや。

凡聖賢愚の分岐點

花を見ては綺麗ぢやと思ひ、月を見てはよ美くしいと思ふ、之れを第一念といふ。此の第一念には佛も凡夫も、智者も愚者も變りはない。佛が見ても美人は美人、醜婦は醜婦。我々が見ても美人は美人、醜婦は醜婦。之れには何の變りはないが、此の第一念に引續いて起る心を第二念といふ。此の第二念が、佛となるか、鬼となるか、迷ひとなるか、悟りとなるかの分岐點ぢや。柳は綠、花は紅、山は高く、海は深し。之れは我々も佛も一見同體ぢやが、第二念に至つて天か地か、地獄か極樂か〝分る〟のぢや。同一の花に對して、或は天地の美妙を悟るものもあれば、或は花の下に一盃を傾けようとするものもあり、或は花に依つて無常を觀ずるものもあれば、或は花を盜まうといふ惡心を起すものもあらう。此處を毫釐の差天地懸隔といふが、畢竟一枚の

鏡ぢやが表を見るか裏を見るか、明となるか暗となるかの差ひで、善惡苦樂が分るゝのぢや。そこで我々が如何に修養するか、鍛練するかといふは、畢竟此の第二念の上の話ぢや。

丸裸の儘の威儀品位

「喜怒哀樂の未だ發せざるを中と謂ふ」と儒典にも說いて居る。此の中庸を守つて失はぬといふのが人間修養の大本ぢやが、さて如何にせばよいかといふに、前に返つて「放下着」ぢや、何も斯も身に纏はり着いたものを脫ぎ棄てて丸裸になつて仕舞うて見るのぢや。人間は丸裸には容易になれぬが、湯に入る時は丸裸になるぞ。着物を着換へる時も丸裸になるぞ。精神を入れ換へようとするには丸裸にならねば仕樣がないぞ。「生れ子が次第々々に智慧づきて佛に遠くなるぞ悲しき」、之れを元に返つて丸裸になつて、綺羅錦繡で表面を繕うて見かけをこしらへたのぢやなくて、丸裸のまゝの威儀品位を保つのが禪の修養ぢや。「春もやゝ景色とゝのふ月と梅」、此處で初めて春の光が出るのぢやぞ。

活才術の本義如是

前の趙州和尙の處に來た僧は、趙州が「放下着」、何も斯も棄てゝ仕舞へと

いうたのぢやから、僧は之れに答へていふことには、「既に是れ一物不將來、箇の甚をか放下せん」、『一物も持たないのぢや何を棄てますか』といふと、趙州がいふことには「擔取し去れ」、『徹底無我無執になり切つたら、然らば無我無執を引擔いで何處へでも持つて行け』というたのぢや。卽ち丸裸の修養が十分積んだなら、其の時こそ自由自在、天上天下、隨處に働け、其の上では如何なる禮服、衿をつけても構はぬぞというたのぢや。乃ち此處が縱横無碍活潑々地の活機活略、活智活才が躍動して現はるゝ狀態ぢや。分つたか。活才術の要義大略如是。

活才術終

大正四年十二月十五日印刷
大正四年十二月十八日發行

不許複製

編者　井上泰岳

活才術　定價六拾五錢

發行者　增田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地
印刷者　笠間音次
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所　東洋印刷株式會社
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話八七四、八七五、八七六、九八九
振替貯金口座東京三二六

學德一代に冠たる稀世の高僧

可睡齋主 日置默仙師著

鍊膽術

九版

□定價五十五錢□
□郵稅四錢□
□紙クロース□
□三六版美本□

處世修養の活本領

△膽成る處、其處に自ら大雄辯湧き、大智略出で、大勇氣起り、大人格、大見識、大成殷、大風采備はり、事に應じて泰然自若として動かず。

△膽成る處、其處に死生の境を超脱し、有らゆる煩惱、有らゆる妄想、執見、個見を立處に一掃し、而も事を處理する快刀亂麻を斷つが如し。

△膽成る處、其處に自他なく、憎愛なく、寒暑なく、苦樂なく、貧富なく、貴賤なく、名利なく、一切皆空、身心清淨、恰も中秋の月の如し。

△本書は一代の高僧日置默仙師道を說くこと懇切、眞に師の發明に接するの感あり。吾人は本書に依つて悟道の法を知り、處世の大本を知らざるべからず。

鍊膽徹底の大眞義

處世成功の虎の卷

□文學士 三輪田元道著

再版

處世術

□定價六拾五錢□郵稅四錢□三六判總布金文字入美本

教育家として盛名ある著者が多年の經驗より得たる結果として、過去の抽象的處世教育に憑らず特に實際的にして且つ具體的實例を基とし、比較的つまらぬ論法を避け、日常の生活に觸れたる眞個の處世術を、各方面より說述したるが、即ち本書なり。說明平易簡明なれば、何人にも了解するを得ん。立身成功を望む者は速に本書を讀んで光明に接せよ。

再版

美容術

□醫學博士樋口繁次
□醫師三本松清吉共著

□定價六拾五錢□郵稅四錢□三六判總布金文字入美本

本書は世に在りふれたる美顏術を說きたる、お洒落を鼓吹する書籍に非ず。多年著者が科學的實驗研究せし結果として眞の人體美を發揮せんと欲して著述せるもの、苟も文明の社會に雄飛發展せんと欲する者の讀すべき名著なり。垢面蓬頭、破衣破帽を以て得意とせる時代は去れり。現代の文明社會は斯かる見苦しき風體する者を容れず。本書は男性美を發揮する秘訣を說けり。

□身心の健全は安眠に依つて得らる

醫學博士 土田卯三郎 著

◀再版▶

安眠術

『夢すれば即ち疲る』とは宇宙の眞理にして、敢て生理學上の實驗を俟たずして既に吾人の經驗に依て明なり。而も生存競爭の激甚なる現代の活社會に於ては、其心身を勞する事多く、從つて心身の疲勞は文明の進歩と共に益々吾人人類を神經衰弱たらしむ。

而して此活社會に雄飛活動成功を成さんと欲するには、肉體精神共に健全を保たざる可からず。然らば如何にして心身の健全を保つべきか。そは即ち安眠なり。本書は實に其安眠の方法を詳說せるもの、世の活動家に取つて一日も缺く可からざる名著也。

□身心の健全ならざる者は世の落伍者也

三六判

總布金文字入美本

定價金六拾五錢

郵稅四錢

□醫學博士 石川貞吉序 □原 道雄著

再版 最新實用

記憶術

▽學理を基礎としたる實用的最新の研究△

▽學生 ▽教師 ▽學者 ▽事務員 ▽實業家

記憶力は人間の根本的能力である。人生を向上せしめ生活を豐富ならしむる複雜なる精神作用は、一として其の基礎なる記憶力に有して居ないものはない。同天動地の英雄の偉業も、鬼神も驚くべき科學者の大發明も、萬世を指導する哲人の大思想も要するに記憶を以て基礎とする心的作用の一大福音書現はる

發現に外ならぬ。從來記憶術に關する著書坊間に許多あつたが、何れも餘りに機械的で實際的效果に乏しいものであつた。本書は從來の諸種の記憶術に關する重要事項は悉くこれを網羅せるのみならず、更に實用的記憶術に一新機軸を出したるもの、蓋し類書中の最大權威である。

▽讀んで直ちに應用さるゝ最簡易の方法△

三六版總布美本

定價金六拾五錢

郵稅四錢

本書內容

▼記憶術概論

記憶力と記憶術……機械的記憶術……心理的記憶術……感覺的記憶術

▼實用的記憶術

語句の具象化……語句の記憶……語句の類化：記憶術練習

▼記憶力增進法

心身の關係と記憶……腦及神經强壯法

祖國を顧みて

法學博士
河上肇新著

卓越せる見識
優麗なる筆を以つて
西洋文明の
表裏を批判し
解剖せる興趣
無限の快著

大正二年に洋行し本年歸朝せる著者が其徹底せる觀察と深遠なる學殖より西洋文明を解剖せるもの、赤毛布的淺薄なる見聞錄に非ず。卓越せる思想、警拔なる識見に到る處に潑溂として讀者を捉へ之を讀む黑暗裡より光明に出でたる如く西歐の制度文物の眞髓を始めて了解するを得。

最新刊
定價壹圓 郵稅八錢
四六版總クロース
金文字美本箱入

目要

△西洋文明の分析的性質△鍵附の戸と紙張の障子△日本民族の血と手△人間の茶碗と犬の茶碗△舞踏及音樂△西洋の個人主義△西洋の物質文明△戰爭と血液△伯林脫走記△外數篇

現代の政治

帝國大學教授法學博士
吉野作造新著
定價壹圓參拾錢 郵稅十二錢
菊判總布箱入金文字

深刻徹底の活論

權勢に怖れず政黨政派に囚はれず憲政の本義より政治の活問題を抉剔解剖論斷す

著者帝國大學に政治學を講ずる傍、其高邁なる識見を吐露し深遠なる學殖を傾盡し現代政治を批判す。其言常に肯綮に當り識者を驚嘆せしむ。本書は實に先生が心血の結晶にして複雜せる活問題を序に從ひ順を追ひ一歩一歩解剖し論斷し行く所恰も無人の野を行くが如く英氣颯爽として自ら其文章に現はれし言々鏘々として聲々あり惻々人を動かす。

目次大要

民權的示威運動を論ず▲山本內閣の倒壞と大隈內閣の成立▲現下の政局と憲政の將來▲陸奥遼毅の道德的意義▲立憲の本義より觀たる今次の政變▲緒人の政治運動▲隨會の言論▲大正政界の新傾向▲日本には政黨政治は行はれるか

最新刊

筆鋒鋭利嚮ふ所富貴なく元老なく
痛快淋漓當代稀に見る傑出の大著

法學博士　蜷川新著

忽再版

列强の外交政策

定價壹圓五拾錢
郵稅十二錢
菊判總クロース
金文字美本

人種問題と支那保全問題とは二十世紀に殘されたる二大懸案にして之が解決をなすは日本の使命也!!

虎視眈々歐洲列强は互に外交の秘策を弄し苟くも隙の乘ず可きあらば直ちに自家の勢力を伸張せんとす其の虛々實々の跡を究むるは將に三國誌を讀む以上の興趣あり著者燃犀の史眼と政策眼を提げ歐洲に遊ぶや列强の現狀を比見して感慨無量、歸來歐洲の動亂より支那の運命、日本の將來に想到し赤誠筆を呵して本書を成す本書は實に第十五世紀以降、所謂東方問題に於ける列强勢力の消長を檢し其政策より世界の大勢を論じたるもの、論旨堂々快刀亂麻を斷つの鋭鋒を以て紛糾せる事件を解剖す實に帝國將來の外交に對する一大警告なり

再版

農科大學教授農學博士
横井時敬新著

農村發展策

定價壹圓二十錢
郵稅十二錢
本文三百五十頁
菊判上製美本

著者本書に序して曰

□終始國家の富强を思ひ農村發展に盡粹する□
□博士の赤誠凝つて遂に本書成る蓋し稀世の好著□

余愚にして道の難易を知らず、終始一に力を農業の爲に專らにし敢て他を顧る事なし。余は何處迄も農業は國家富强の源にして社會亦一日も農業なくして健全なる發育を期すべからざるを信じて疑はざる故なり。思ふに農業と農村とは蛇蝎蝶翼因より相依るものなり。されば農業の爲に盡すは是れ農村の爲に盡すなり。農村の爲に盡すは是れ農村の爲に盡すなり。農村の爲に盡すものは農業の爲に盡すなり。余は常に農村を忘るゝ能はざる職として之に由る耳。今や我國の農政動もすれば農業技術の末に走り民政亦偏に形式に流れんとす。是を以て農業益々改良せられて農村却て窮乏を訴へ、自治の政漸く擧りて農村則ち衰頽に傾かんとするの患あり。此際此時苟も國を憂ふる者豈に毀譽褒貶を慮りて獻芹の誠を世に致すを憚つて可ならんや。

□著者の抱懷以て見るべく本書の價値以て知るべし□
□地方青年及指導者は勿論苟も憂國の士は讀め□

舊き文明より新しき文明へ

最新刊

中澤臨川著 定價八拾五錢 郵稅八錢 菊半截總クロース金文字箱入美本

現代文明を論じ當來の新文明を卜す……新ハムレット新ドンキホーテ……現下の社會的動搖……生命の傳統……ロマンロオランの眞勇主義……思想の實行……思想藝術の現在……生命の哲學……新合理哲學……現代の世界觀……自然意思と人爲意思……人格と哲學……藝術の鑑賞

當代第一流の文藝批評家が見たる現代文明の推移及歸趣現代人必讀

□一文明の爛熟して其弊に堪えざらんとする時、更に新しき文明の起るは常なり。生存力の旺盛なる國家が頽廢のどん底より新意志を創造して一夜に生れ變れる例は昔より決して尠からず。

□現時の社會に何となく物々しく動搖の兆候あるは此の疲弊と倦怠とを破らんとする現代國民の切迫せる要求に非ずや。果して然らば將に起らんとする此新機運は如何なるものぞ？

□本書は實に此の問題に答へたる、當代第一流の批評家中澤臨川先生の答解にして興味津々たるもの、切に新人の一讀を薦む。

□好評□

社會と自分

縮刷

□八版□

夏目漱石著

津田青楓裝幀三六版
表紙天竺木版刷瀟洒
▲定價壹圓廿錢▲郵稅八錢

▽先生は筆の人にして筆の人に非ず。創作家にして創作家に非ず、現代一切の文明思想に對する嚴然たる思想人格の城廓なり個性の宮殿なり△

▽赤裸々なる漱石先生を知らんと欲せば先づ本書を讀め△

內容

職業と道樂。現代日本の開化。中味と形式。文藝と道德。創作家の態度。文藝の哲學的基礎

夏目先生の著書は多し。然れども先生の性格と思想と情行とが最もよく發露せられたるもの本書の如きはなし。本書收むる處、長短六篇、先生が文藝に對する抱負、識見、并に社會に對する旗幟の一讀鮮明するのみならず徹底せる思想の堂奧に觸れて、自己啓發の深刻なる印象を感銘せらるべし。

廣津柳浪著

◀再版▶

柳浪傑作集

我が文壇の大家たる著者が、明治文壇に殘せる大なる足迹にして、著者が得意とせる人生の悲慘なる一面を寫せる所謂深刻小説の粹、集つて本書にあり

先生今や病を得、筆を絶つて伊勢菰野の温泉に養ふ。紅葉山人以後其の深刻なる觀察と凄艷の筆を以て、明治文壇に雄飛せる先生が作物に再び接する又容易ならず。本書は實に先生が麗筆の縮圖にして又明治文壇の代表作也

三六判總布金文字入
優美裝幀函入美本
定價壹圓廿錢
郵税八錢

内容
▲黒蜴蜓▲雨
▲今戸心中▲淺瀬の浪
▲亀さん▲變目傳

□構想雄大波瀾重疊血あり涙ある大傑作

銀笛

□上卷□

■寫實小説の大家として濃艶の靈筆常に滿天下の士女を驚倒せる天外先生が初めて執筆せる新しき家庭小説也
■誤つて殺人の罪を犯せる剛藏の一子美少年梅之助が吹く銀笛の、その靈妙の音に涙をしぼる人は誰ぞ
■艶麗花の如き美少女多美子あり燃ゆるが如き熱血男兒達夫あり波瀾萬丈一讀涙止め難く頰熱し胸躍る

□定價壹圓參拾錢□郵税八錢□四六版上製五百頁總布美本□

忽ち三版

寫實小説大家
小杉天外新著
鏑木清方筆美麗口繪

小品文集

銀杏の葉蔭

第三帝國主盟

茅原華山 著

七版

全篇悉く是れ無韻の詩。讀むに適し誦するに好し

▲茅原華山先生、辯を能くし文を能くし、一度演壇に立てば聽衆悉く熱狂し、筆を採れば讀者悉く其美に心醉す。

▲華山先生『萬朝』を去つて『第三帝國』を創刊するや、先生を渇仰する天下幾萬の青年、直ちに其傘下に集り隲然一大勢力を成す。筆の力の偉大なるを見よ。

▲熾烈鐵を溶かす火の如き情緒、鑑識眼を眩する花の如き詞藻、是れ先生の文章に非ずや。

▲苟くも文字を解する者は華山先生の文を讀まざる可からず。華山先生の文を愛する者は本書を讀まざる可からず。

▲本書は實に先生が血の滴りなり。情の結晶なり。神韻縹渺、燦として辭あり。朗々誦す可し。

□三五判 □総布函入 □新美本型

定價五十五錢

郵税六錢

史壇の泰斗 福本日南著

栗山大膳

日南先生は史壇の巨擘、史實正確にして細密、百の材料、千の典據により、世上の妄説を排し、其の眞骨頭を捉へて之に新たなる血を注ぎ、肉を添ふ。大膳は黒田家の家臣にして——

黒田騒動（黒田忠之の叛逆事件にして家臣栗山大膳主君忠之を幕府に訴へたるに因す）

駿河騒動（徳川三代將軍たる竹千代と駿河大納言國松との繼嗣爭ひにして徳川大奥の秘密暴露）

肥後騒動（加藤肥後守忠廣の叛逆事件にして之に依り當時將軍家と大名との關係を知るを得）

に終始關連し、史家の實に疑問とせる此三大騒動の眞相を明かにし、更に徳川初三代將軍の大名取潰策を述ぶ。徳川初期の紛糾せる史實歴々として掌を翻すが如く、波瀾重疊、起伏縱横、小説を讀む以上の興味あり。文章華麗にして剛健、絢爛にして雄渾、眞に近來の快著たり。

再版

定價壹圓六拾錢

郵税拾貳錢

菊版總布函入

金文字入裝幀美本

□一封の手紙・一枚の葉書・吾人の成敗を分つ事多し□

作法 文範 書翰文大全

三版

本書先づ其作法に於て、業務用、社交用、其他百般の手紙に就て其腹案の法より、構成法、文句の修練、諸禮式、手紙道德、巧慧實直の事凡て一々文例によりて縷說して盡さざるなく、殊に新舊書翰文を對照して現代書翰文の理想を敷ふ。

文學博士關根正直　文學士高木尙介共著

□定價壹圓八拾錢□

□郵稅拾貳錢□

菊判總布金文字函入
總頁數六百五十頁

胃頭錄錄

字音引實用辭典

文範の如き亦全然現代的の活文例にして、數百の文範、悉く其の種類に依つて區分し、引用便利、雅俗硬軟、隨意隨所に其活模範を得べし而も胃頭には特に日常用ふる文字數萬を集めて、之を字音引となし、隨時引見するの便としたり。蓋し處世上一大名著也

南洋へ！南洋へ！

海外に成功を望む者は本書を讀め!!!

再版 踏査研究 南洋の寶庫

海國男子の必讀書!!!

我が新發展地を知れ!!!

■後藤男爵題字　■陸軍步兵少佐從五位勳四等神保文治著

大正帝國の國是は開國進取なり。宜しく海外に向つて發展せざる可からず。本書は我が國民の新發展地にして、無盡の寶庫たる南洋を踏査研究せし結果、その全土に亘りて我が國民の業務の現況より他外國人との關係狀態を初め、南洋の農業論、將來有望なるボルネオ島の情況、南洋の天候と衛生、農業殖民に關する方法等を詳說す。蓋し近來の快著にして、南洋の寶庫を開く唯一の鍵なり。

●四六判總布金文字入●

裝幀顏美函入

定價八拾五錢

郵稅八錢

新渡戸博士

縮刷 修養

四十六版

■定價壹圓
■郵稅八錢
■袖珍型美本
■三方金總革函入

本書は博士が四十餘年間の學問經驗を傾注せられたるものにして、品性、人格及び處世法に亘りて懇說せられたる古今獨步の名著なり。其の說明の親切にして、同情に富める、その材料の豐富にして、趣味の津々たる、さながら滾々として湧き出づる天泉の甘きにも比すべきか。眞に每戶必藏すべく、萬人必讀すべき活經典なり。

苦心の名著

世渡りの道

十四版

■定價壹圓七拾錢
■郵稅十二錢
■菊判上製
■函入美本

本書は博士の前著「修養」の姉妹篇なり。共にこれ修養を說けるもの、實に異體同心の書なるを以つて、「修養」を讀める人も亦必ず本書を讀まざるべからず所說懇切を極め、文章また平明流麗にして、篇中に橫溢する誠意と同情とは、直ちに博士に接して其の卓見高說を聞くの思あるべく、一讀直ちに世渡りの妙訣を覺り得べし。

一日一言

二十九版

法學博士 農學博士

新渡戸稲造著

學識古今東西に亙り、德望一代に冠たる
博士が苦心慘憺熱血を注ぎて成れる名著

博士曩に自動車にて負傷し、溫泉に遊ぶや、折柄訪れ來れる一青年の痛ましき半生の經歷を聞き、深く感動し、爾來世の爲、人の爲、精神的食料を供せんとし、慘憺苦心の結果、本書成る。一年三百六十五日にあてはめ、修養に關する博士の感想を記し、尙東西古今の金言及び道歌を挿む。苟くも意義ある生活を營まんとする人は、本書に依り慰安と奮勵との源泉を掬まれよ。

萬人必讀の活經典、一度之れを繙けば明鏡に向ふが如く忽ち自己の歸趣を自覺す

■重版又重版
■定價六十五錢
■郵稅四錢
■三五版美本

實業之日本社
社長 増田義一著

青年と修養

定價金壹圓五拾錢
郵稅十二錢

九版

菊判函入
上製美本

如何に世に處すべきか、如何に向上發展すべきか、克己心は如何に修養すべきか、意思は如何に强固にすべきか、膽力は如何に養成すべきか、就職の途は如何に求むべきか、上長者に對する心得は如何。凡そ青年の心を領する凡百の煩悶、懊惱に對して、最も明快にして適切なる解答を與ふるものは、著者を外にして斷じてある可からず。

著者は青年に最も深き同情を有し、日々訪れ來る幾多の青年には自ら面會し、又折々地方に出張し、常に青年の相談相手となり、千百の難問に對し、最も懇切なる考慮を費し、一々適切なる解釋を與へ、修養の方法を說く。

本書は最も多く青年に接し、又最も多く青年に同情と親切とを有する著者が、多年の實驗により青年の針路を示し、修養を說きたるもの、一の空理空論なく、一々適切にして趣味ある例を擧げ、微に入り細に亘る。本書は實に青年自らの必讀書なるのみならず、青年子弟を有する父兄、教育家、先輩の一讀せざる可からざる良書なり。

家庭の衛生

村井弦齋著

□四六版頗美本　□本文五百餘頁　定價一圓廿錢　郵稅八錢

家庭問題に關して常に研究改良に努力せる著者が多年の實驗を吐露せるもの、蓋し家庭衛生の最高顧問也

▼枕　問　題
▼寢　具　問　題
▼安　眠　問　題
▼入　浴　問　題
▼運　動　問　題
▼衣　服　問　題

（內容一般）

微に入り細に亙りて說く。而も說く處皆先生が多年の實驗研究の結果に非ざるはなし。本書は實に家庭衛生の虎の卷にして、又幸福なる家庭を作る寶典なり。須く一書を備へて顧問となし給へよ。

健康にして幸福なる家庭を望む者は速に本書を讀まれよ!!!

腦の衛生

醫學士　樫田十次郎著

□袖珍型頗美本

□定價四拾錢　□郵稅四錢　□袖珍型頗美本

本書は斯道の大家樫田學士が學生、學者、事務家の腦神經を病む者多きを憂ひ、先づ腦の健全法より說き起し、腦と氣分、腦の休息、腦の練習、腦と運動、腦と性慾及び神經衰弱の養生法を說けるもの、文章明解にして懇切

忽五版

活社會に雄飛成功せんと欲せば腦を健全にせよ

胃腸の衛生

四版

之を一讀せよ！强者も弱者も得る所至大。その日常生活の上に應用する所計り難からん。

▽醫學士　野田太市著

□定價五拾錢□郵稅四錢□菊半截□美本一册

▲胃腸の强弱は全身の健康を支配する。食物をして血にならしむるか、肉にならしむるか、齒と舌とそれから胃腸とがこれを司ることいふまでもなし。本書は胃腸の働きから其處に起る一切の病氣の原因、徵候、症狀、療法、食物に關する一般常識を說いて細大洩らさず。何人にも讀んで直ぐ其日から役立つやう懇說してある。健康者は益々强健ならんため、病者はその病を快癒せしめんため、必ず一本を備ふべし。

皮膚の衛生

四版

醫學士　古宇田傚太郎著

□菊半截

□裝幀優美

□定價四十錢

□郵稅四錢

皮膚の健康と人體の保全

著者

古宇田氏は、篤學多才の士にして、諸種の專門學校に教鞭を執りて研鑽倦む所を知らず。本書は氏が多年の研究と實驗とにより、皮膚に關する一切の病氣の原因症狀療法等及び一般の化粧法を平易に詳說せるもの。而して其の療法は何人にも出來る極めて簡易なるもののみ。

深遠なる學理と多年の實驗

內容

□皮膚のはたらき□皮膚の手當□毛髮にはどんな注意が要るか□顏の衛生と化粧法□にきびと赤鼻□あざとほくろの類□濕疹の類□白癬の類□しもやけとひび類□いぼとたこのめ□火傷と凍傷□爪の衛生□ねぶと□痒い皮膚病□蟲類の傷害□藥の中毒から起る皮膚病其他種々

六十四版（實業之日本社編纂）

心身修養

岡田式靜坐法

改訂增補

▽岡田先生靜坐創瓶の由來經路

岡田式靜坐法が精神を修養し體力を增進し萬病を快癒し、國民の心身に偉効あるは社會の公認する處なり。本書は此良法を普く實行せしめんが爲に著せしもの。今や實驗者數百萬。

▽岡田式靜坐法の原理及其方法

本書異常の大好評の下に版を重ぬる六十有餘、年を經る三年、書中に掲載せる實驗の諸君其後の進境また別人の觀あり。即ち增補改版、玆に全く面目を一新して之を世に問ふ。

▽廿餘名士の實驗苦心談數十章

圖三六版 綴クロース金文字入 美本
圖岡田先生靜坐寫眞入ポイント活字組
圖紙數六百餘頁 定價六十錢 郵稅六錢

二日三晩不眠不休疲勞を感ぜず

體格偉大　精力絶倫

氏月銀藤伊るた的の望羨の人間同

多年實驗の

實用的 强健法

定價六十五錢 郵稅六錢

四六全版

五

著者伊藤銀月氏は其青年時代體格虚弱、根氣なく精力なく、意志薄弱にして到底實社會に活動するに堪えざりき。而も今日は體資强健、筋肉締り勞力衆に超え、精力又絶倫にして毫も倦怠を覺えず。

▽一分間にて偉効ある强健法▽

版

斯くの如く虚弱なる體質の今日强健となれる所以、偏に氏獨得の工夫に成れる三十秒の緊張法と、三十秒の弛緩法とを實行するに因す。本書は此運動法を詳說し因に古來一切の强健法を紹介せり。

實業之日本社發行

六大定期刊行物

實業之日本

▲一冊拾壹錢郵稅一錢五厘▲毎月二回一日十五日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共壹圓六錢▲新年號ヲ含ム時ハ壹圓七拾錢▲一年分增刊共參圓貳拾錢

婦人世界

▲一冊拾五錢郵稅一錢五厘▲毎月一回一日發行▲半年分增刊郵稅共壹圓五錢▲一年分同貳圓五錢

日本少年

▲一冊拾錢郵稅一錢五厘▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十三錢▲一年分同壹圓四拾錢

少女の友

▲一冊拾錢郵稅一錢▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七拾錢▲一年分同壹圓卅五錢

幼年の友

▲一冊拾錢郵稅五厘▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半ケ年七冊郵稅共六拾八錢▲一ケ年十四冊同壹圓參拾錢

實業講習錄

▲毎月二回一日十五日發行▲一ケ月分二冊金五拾錢▲三ケ月分六冊壹圓四拾五錢▲六ケ月分十二冊貳圓八拾錢▲九ケ月分十八冊四錢拾五錢▲一ケ年分廿四冊五圓五拾錢

70
309

終